

「奇怪な再会」論

— 帝国男性のまなざしをめぐって —

姚 紅

第一節 はじめに

芥川龍之介の「奇怪な再会」は一九二二年一月五日から二月二日にかけて、一七回にわたって「大阪毎日新聞」夕刊に連載された新聞小説である。同年三月に『夜来の花』（新潮社）に収録され、翌年の一〇月に選集『奇怪な再会』（金星堂）に収められている。この作品がどのような性格を持ったものなのかは、執筆中、中西秀男に宛てた書簡に「小生は今大阪毎日に『奇怪な再会』と云う怪談を書いています」という一節、また連載開始直後の一月六日の日付で小澤忠兵衛宛の書簡に、「大阪毎日へ怪しげな小説を書き出した為又多忙になりましたこれは一週間ばかりすると片づきます」と書かれていることからわかるように、芥川自らはこの作品を「怪談」や「怪しげな小説」と規定している。

この作品において、主人公のお蓮は、日清戦争後陸軍一等主計の牧野に東京本所の妾宅に囲われている。昔彼女には金という恋人がいたが、彼が急に消息を断つてしまった。ある夜、お蓮は金の夢を見て占い師に占つてみたが、東京が森や林にならない限り、再び金に会えないと言われた。昔中国で飼っていた愛犬によく似た白犬が病死した直後から、お蓮の精神は常軌を逸し始め、奇妙な幻覚や幻聴を見聞きするようになる。さらに妾宅を訪れた牧野の友人田宮の言葉から、お蓮は金が牧野に殺されたと確信するようになる。深夜、お蓮は牧野を殺そうとしたが、闇から聞こえてきた声に「明日の晩、弥勒寺橋に金が来る」と告げられ、思いとどまる。お蓮は一人で弥勒寺へ行つたが、植木の中で「どうとう東京も森になったんだねえ」と何度も繰り返す。牧野と共に妾宅に戻ってきた彼女は二階の座敷の闇に籠る。すると、白犬は金になり、窓の外の景色も森に変わっていた。お蓮は牧野に脳病院に運ばれた後、本名が孟憲蓮で、日清戦争の際中国威海衛の妓館で客をとっていたことが、脳病院医者のKと「私」の談話によって明らかになる。¹⁾

この小説が発表された年の六月、南部修太郎はこの作品を「氏の怪奇に対する悪趣味に発露した、露骨過ぎる拵へものであ」り、「芸術品を骨董的に愛翫する人なら知らず、それ等を頭の遊戲、筆のすさびと非難されても、恐らく作者は一言も無いだらう」と強く批判していた。吉田精一は鷗外の「鼠坂」と鏡花の「三尺角」を合わせ取り上げて、「あまりにも理論的なスタイルや文章が、物凄く筆の感覚や情景をも妙に割り切った物にしている」と述べている。また菊地弘は、「主題の点でも『南京の基督』と通じるもの」とし、『マクベス』の魔女の予言を思わせるような筋などが注目される」と指摘している。

以上の先行研究はこの小説を他作品との関連性から論じているが、詳しいテキスト分析は行っていない。それに対して、怪奇推理小説の立場から作品論を展開した井上諭一⁽⁵⁾論と、物語の構造に着目しつつ論じてきた一柳廣孝と岡田豊の論は従来の「奇怪な再会」論と異なるもので、新しい作品論として注目されるようになってきた。

たとえば、一柳廣孝は芥川作品における〈夢〉の分析を通して、「お蓮の精神崩壊に至る心理劇を、イメージ連鎖、および語りの入れ子構造を駆使して夢―幻覚／現実が錯綜する過程を明示しようと試み」て、「三重の語りによって焦点を結ぶべきお蓮像は、実は様々な不確定要素によって迷宮のエクリチュールに閉じ込められたまま放置されている」と述べて、「奇怪な再会」が「典型的な幻想文学」であると結論づけた。⁽⁶⁾岡田豊は、一人称語り構造を再検討した上、この小説を「読者の読みを一定の方向に向かわせてはいない」ものとしながら、「複数の話者の言葉と出会わせ、語られる過程自体を提示することで意味内容を補填していく読みの行為が常に試されるテキストである」と述べている。⁽⁷⁾

近年、注目されるようになったのはポストコロニアリズムによるアプローチから日本近代文学における帝国主義や植民地要素を批判する傾向である。そのようなテキスト批判によって、日本帝国と半植民地化された中国の支配／被支配の力関係から、芥川の中国題材小説の再評価を試みたのは孔月である。孔月は、日本帝国主義な侵略を行った時代の言説やコンテキストを合わせて、「政治的・性的に支配される存在になった」お蓮を日清戦争後の半植民地化された中国の隠喩的な表象と捉え、この小説を作家芥川の「国家と国際関係、そして民族としての〈他者〉」に対する鋭い観察を踏まえた、支配的イデオロギーに対抗する先鋭性を帯びている「ものとして積極的に評価してい

る。

「奇怪な再会」はお蓮が幻覚で昔の恋人に会えると確信して狂っていったという狂気で締めくくられていることは前述した。芥川の狂気への関心を示す作品には、この「奇怪な再会」以外、「忠義」、「二つの手紙」、「疑惑」、「歯車」、「河童」といった諸作もある。芥川の小説における「狂気」については、これまで実母の疾患と自己の遺伝体質への恐れ of 告白の問題に収斂させてしまう傾向が強かったが、この小説に見える狂気と女性性の結びつきに関してはあまり論じられていないのが現状である。本稿は、狂気の女性を主人公として、彼女が狂気になってゆく経路を描いた「奇怪な再会」が芥川龍之介作品における「狂気」と「女性性」の結びつきを示唆していると考ええる。例えば、お蓮という女性を語るのにどのような言葉が使われているのか。また、この女性について語っているのは誰なのか。一体、誰がこの女性の他者性をどのように語っているのか。時代のイデオロギーとの関係を見渡しながら、小説内の男性の発言や眼差しに焦点をあて、お蓮の身体性と精神性の両者にわたって抑圧された中国人としてのアデンティティと彼女の精神崩壊に関する分析に当たって、男性登場人物に語られ／見られるこのアデンティティ回復の意思と狂気と交じった中国女性像を分析してみる。

第二節 戦利品としての女

一八九五年一月日本軍は山東半島に上陸し、二月威海衛を占領、中国清朝の海軍を撃滅して大勝利となる。四月に結んだ「下関条約」において、清朝は朝鮮の独立を認め、遼東半島、台湾、澎湖島を割譲し、莫大の賠償金を支払うことになった。この小説でお蓮が関係する舞台としての威海衛は戦争直後暫く賠償金支払いの保障という理由で日本の占領にあったが、一八九八年以降はイギリスの租借地になった。

このような時代背景を考えると、冒頭で現した陸軍一等主計の牧野の逞しい軍服の姿は軍国主義の色彩を帯び、半植民地化された中国に対する植民宗主国の権力を持っている支配側の象徴として浮かび上がってくる。

旦那の牧野は三日にあげず、昼間でも役所の帰り途に、陸軍一等主計の軍服を着た、逞しい姿を運んできた。
(中略)

牧野は始終愉快そうに、ちびちび杯を嘗めていた。そうして何か冗談を云つては、お蓮の顔を覗きこむと、突然大声に笑い出すのが、この男の酒癖の一つだった。

「いかがですな。お蓮の方、東京も満更じゃありませんまい。」

お蓮は牧野にかう云はれても、大抵は微笑を洩らした儘、酒の爛などに氣をつけてみた。(二〇一頁 傍線は引用者による、以下同)

「戦利品」のお蓮を覗き込む牧野の欲望の眼差しには、お蓮の身体的「美しさ」を析出していく一方、その「愉快」な笑いの背後には、牧野＝日本帝国の男性、お蓮＝中国の女性という二項対立の構図が認められ、日本帝国男性が劣等国の女性に対して力を持つという優越感が読みとれよう。ところで、日清戦争に勝利した日本人の優越感はこの牧野だけのものではなく、同時代の日本社会に強く根を下していた。

「下関条約」を結ぶ前、日本軍は旅順、威海衛などの戦役で中国から大量の戦利品を捕獲した。参謀本部の「陸軍戦利品整理員数表」によると、軍事武器以外は、当時清軍の将兵が着用していた被服類、軍旗など軍事的に役立たないものまでも「記念ノタメ」「帝室ニ献納」されたり、全国の「軍隊・学校・神社・仏閣等二分配シ、永久ニ之ヲ保存」された。一般的には、日本軍部や政府は日清戦争から得た戦利品を展示したり、広く学校や神社など日本全国の公共施設に分ち与えたりしたのは、日清戦争での「勝利」の「喜び」を広く国民に分与するという目的であった。一方、戦争終了後、「戦利品」の中で軍事的に無価値のものを国民に展示したのは、国民の間に強まっていた「軍国主義」の風潮をいっそう助長させ、中国の「後進性」・「落伍性」を強く印象づけて中国に対する侮蔑感・優越感を植え付けることを意図した軍部と政府の狙いであった。

すでに言及したように、お蓮は敗戦国の女であるゆえに、彼女は牧野が戦地から持ち帰った「戦利品」と言ってもよからう。牧野は彼女が「日本着物」に着替えた美しくて温和な姿に戦勝国側の男性としての優越を絶えずに認

識し、肉体的にも精神的にも満足している。そのことは、相手の女のお蓮にとつては、自分が日清戦争によって略奪された女（妾）であり、男性的「快樂」の欲求を満足させる性的な対象（客体）であることを認識していることが強調されていることにもつながる。しかし、注意しておきたいのは、「お蓮の方、東京も満更じやありませんまい」という牧野の発話に対して、お蓮が「微笑を洩らした」だけというその沈黙の意味である。ここでは、発話「沈黙」という二項対立は支配―服従という権力関係の二項対立に重なっている。その対立を媒介しているのが、帝国男性―半植民地女性という二項対立ということになろう。この三重の関係によって生じる優越感を持っている牧野には、お蓮の沈黙が強い男性の支配への温和な服従としてのみ理解されるかもしれないが、そこに男性側の一方的な錯覚が生じていることを認めねばなるまい。彼女の沈黙は、むしろこの三重の支配―服従関係への抗議を秘めていると見るべきであろう。アイデンティティの表現たる言葉を奪われているが故に、かえって言葉以上の表現力や新しい意味を内包していると捉えなおすことができる。それは自己のアイデンティティと主張の抑圧、被害者としての複雑な無力感を含めながら、したたかな自己の肯定を求めているということになる。

牧野とお蓮の男女関係は基本的に支配―服従の権力関係に組み込まれているが、そのほか、この二人の周辺には多種多様な人物が登場し、縦横に織り込まれている。牧野、お蓮の間に彼女の昔の恋人―金を割り込ませることで、この小説の中心に位置する三角形が作られている。一見すると、一人の女をめぐる二人の男といったよく見られる男女三角関係と言えるかもしれないが、実際はこの三角形は不安定である。なぜならば、金という人物は人間としての実体を持たず、ほとんどお蓮の夢や幻覚に出たり、白大の振る舞いに幻想を仮託してお蓮の生活に影を落したりしているに過ぎないからである。たとえば、お蓮の薄暗い船室の夢で、金の「悲しさうな微笑を浮かべながら、ちつと彼女を見下ろしてゐる」という姿は彼がすでに声と生を奪われたことを示唆している。また、牧野は、金という中国男性の存在に対して気がつきながらも「嫉妬を感じなかつた」のも金の行方を知っていたからである。したがって、二人の男と一人の女という欲望の三角関係は、金が抹殺されたことによって破られ、牧野とお蓮との支配―服従という形となっている。牧野にとっては、日清戦争が敗戦国の男性の尊厳や生を無視し、その国の女性の肉体を独占して彼の性的支配の欲望を充足したという二重の享樂をもたらしたばかりでなく、さらには彼はこの戦

争を通して性、民族、人種、階級など日本帝国軍人としての優越感も確認できるものであった。このように、植民地支配の下で挫かれた中国の男性性、それに対して帝国として膨張する日本の男性性は、お蓮という中国女性表象に深く刻み込まれている。

(七) でさらにもう一つ見逃していけないのは、日清戦争の幻燈に対して牧野の冷やかな視線である。

劍舞の次は幻燈だった。高座に下した幕の上には、日清戦争の光景が、いろいろ映ったり消えたりした。(中略) しかし実戦に臨んで来た牧野は、そう云う連中とは没交渉に、ただにやにやと笑っていた。

「戦争もあの通りだと、楽なもんだが、――」

彼は牛荘の激戦の面を見ながら、半ば近所へも聞かせるように、こうお蓮へ話しかけた。(二二五頁)

日清戦争を描いた幻燈に「帝国万歳」を叫んだ観衆達と異なつて、牧野の冷やかな視線には何か深い意味が含まれているのだろうか。日清戦争は近代日本が初めて迎えた本格的な対外戦争であった。当時の日本では政府から民衆までほぼ一体となつて戦争への関心が高まつていた。戦前から戦時にかけての献金・物品献納、応召者送別会、そして戦後の戦利品展覧会、「凱旋」出迎え、幻燈会などの活動を通じて民衆は多様に戦争行事に動員され、天皇万歳・帝国万歳・軍隊万歳の連呼、御真影の活用、「国旗」の掲揚、国歌の斉唱などを通じて、天皇・政府・軍隊を中心とする集団の一体感を自覚するために繰り返し民意を高揚させていった。日本では上から国家認識が醸成されていった。

しかし、現実の戦闘を体験してきた牧野は、幻燈会で目にした天皇・国家への民衆の熱狂的な「忠節」に対して、「戦争もあの通りだと、楽なもんだが」と呟くことから伺えるように、集団的熱狂からは距離を置く形で個人の「生」を意識した。それゆえに、帝国軍人としての彼のアイデンティティの確認は、敵国の男性性を殺害し、敵国の女性お蓮を奪取して、彼女の中国女性としてのアイデンティティを抑圧することによって達成されるといったものであった。征服した国の男性が征服された国の女性を所有する過程で、女性は自国のアイデンティティを喪失し、怪蔑

され抑圧されるようになる。他者―野蛮な異国女性への支配と独占は帝国主義の力学によってその正当性を保証される。こうして帝国男性側の「生」の快樂に奉仕するために、「丸髻」を結び、着物を着て、改名して暮らさざるを得なかったお蓮の中国人女性としての「性」／「生」は奪われてしまった。

モッセはナシヨナリズムと家父長的な性差別主義及び人種的差別主義とが結びつき、宗主国の男性たちが周縁的なアジア、アフリカなどの異人種の女性たちを性欲の対象として大量に消費する一方で、自国においては市民的モラルの名のもとに女性を家庭の中に閉じ込めるようになったことを指摘している。

牧野はお蓮を妾とする前に、既に妻と男女二人の子供を持つている。しかし、お蓮を妾宅に囲んできて以来、彼はお蓮の美貌と従順な性格に満足し、妻との離婚も企てた。

「鼻かい？ 鼻とも近々別れる筈だよ。」

牧野の口調や顔色では、この意外な消息も、満更冗談とは思われなかった。

「あんまり罪な事するのは御止しなさいよ。」

「かまうものか。己に出でて己に返るさ。おれの方ばかり悪いんじゃない。」

牧野は険しい眼をしながら、やけに葉巻をすばすばやった。お蓮は寂しい顔をしたなり、しばらくは何とも答えなかった。

(二二二頁)

戦地から中国女性を略奪した牧野は、離婚の原因が自分の犯した罪にあるというよりも、妻の方にあると強調している。ここでは彼の家父長的な男性支配のイデオロギーが読み取れる。モッセの主張が裏書きされるようなプロット構成となつていよう。ところで、ここでは牧野の「険しい眼」とお蓮の「寂しい顔」が鮮明な対照となつている。牧野が妻と離婚しようとする話を聞いたお蓮は、それを「罪」とみなし、内心の悲しみが「寂しい顔」となつて表れた。

一八七三年三月に実行された太政官布告第一〇三号は日本初の国際結婚に関する法令と言われている。その中で

次のように日本人の国際結婚が規定されている。

日本人外国人ト婚嫁セントスル者ハ日本政府ノ允許ヲ受クヘシ

(中略)

日本人ニ嫁シラル外国ノ女ハ日本ノ国法ニ從ヒ日本人タルノ分限ヲ得ヘシ

一八七十年代から一八九十年代にかけて、日本人の国際結婚についての調査の中で、日本人男性と中国（当時の「清国」）女性との結婚は一例もなかった。その原因を当時の「日本人改良論」に求めることができよう。「日本人種改良論」とは、日本人と先進文明国の外国人（主に欧米系の男女）との国際結婚によって日本人種の改良を目指したものであった。その例として、林房太郎は一八八四年の『内地雑居評論』で「優等人種ト雑婚スレバ血統遭伝ノ理ニ由テ次第第二其體質心性ヲ改造スル事ハ疑ヲ容レズ」と主張している。同年、高橋義雄は『日本人種改良論』で「劣等人種が優等人種ト雑婚スルノ際ニハ劣等人種ニ取リテハ多少好結果ヲ来ス」と強調している。

このような時代背景にあつて小説の文脈を読み返そうとすると、牧野は陸軍の一等主計として、彼の結婚と離婚は個人の自由によつて決められるものではない。日本人妻と離婚できるとしても、外国人といつても、当時「野蠻国」と見なされていた「支那」の女性のお蓮には牧野との結婚の可能性がまったくなく、帝国の男性の欲望を満足する「モノ」――「妾」にすぎないということが暗示されている。この文脈で解釈すれば、お蓮が「私の国の人間は、みんな諦めが好いんです」という牧野に呟く言葉には、略奪される形で帝国男性が戦地から得た「性的戦利品」になったという中国女性の悲惨な運命が意味されている。

第三節 性商品としての女

お蓮を日本へ密入国させ、妾宅に囲もうとする計画に大きな役割を果たした重要な人物は田宮である。「御用商人

の店へ、番頭格へ通つてゐる」という帝國軍隊御用商人として、陸軍一等主計の牧野と緊密な関係を持った田宮は、危険を冒しても主計のためにこのお蓮を密入国させようと骨を折つたのである。

「ねえ、お蓮さん。あの時分の事を考えると、まるで夢のやうぢやありませんか。」

(中略)

「私も牧野さんに頼まれたから、一度は引き受けて見たようなものの、万一ばれた日にや大事だと、無事に神戸へ上がるまでにや、随分これでも気を揉みましたぜ。」

「へん、そう云う危い橋なら、渡りつけているだらうに、——」

「冗談云つちやいけない。人間の密輸入はまだ一度ぎりだ。」 (二一八〜二一九頁)

引用文から見ても分かるように、田宮があえて危険を冒してお蓮を日本に密入国させたのは、御用商人と高級軍人といった特定の関係にある牧野に頼まれただけであつた。牧野と田宮の二人の間にお蓮を割り込ませるといふ三角形においては、一人の女をめぐるライバルの二人の男が競い合うといった伝統的な男女三角関係と違つて、田宮と牧野の日本人男性同志の仲間意識というよりも、むしろ御用商人と軍人の共犯関係が強調され、中国人女性としてのお蓮は彼らの客体にすぎなかつた。そこに男女の恋愛による女性の主体性などといったことはまったく問題にならなかつた。

「密輸入」という冗談めいた言葉は牧野の商人気質を現しながら、その背後にはお蓮が一人の女性というより、むしろ一つの「商品」に過ぎないという本質をよくうかがわせている。男性の性欲を満足させる「性商品」であるという田宮のお蓮に対する認識が読みとれる。

「どうです？ お蓮さん。その内に一つなりを変えて、御酌を願おうじやありませんか？」

「そうして君も序ながら、昔馴染を一人思い出すか。」

「さあ、その昔馴染みと云うやつがね、お蓮さんのように好嬢だど、思い出し甲斐もあると云うものだが、——」
田宮は薄痘痕のある顔に、擦ったような笑いを浮べながら、すり芋を箸に搦んでいた。…… (二二〇頁)

中国人女性に魅了されずにいられないのは牧野一人だけでなく、田宮もその中の一人である。田宮の「擦ったような笑い」には、お蓮とその名も全然触れていない。「昔馴染」の一人のような中国女性がアウトサイダーとして排除され、帝国男性から「見られる性」として、つまり男性の性的欲望を煽る対象としてのメタファーになっている。以下の田宮が二回目妾宅に入った場面では、彼の中国人出身のお蓮に対する軽蔑的な見方がさらに明らかになっていく。

「これはお土産です。お蓮夫人。これはあなたへ御土産です。」と云った。

(中略)

「貼紙を見給え。膾炙たる。膾炙たる。—— あなたは気のふさがの病だつて云うから、これを一つ献上します。産前、産後、婦人病一切によろしい。—— これは僕の友だちに聞いた能書きだがね、そいつがやり始めた佐詰だよ。」 (二三三頁)

日本佐詰協会が一九六二年に作成した『日本佐詰史』によると、大日本水産会は軍用佐詰献納運動を行い、日清戦争中当時社会は佐詰への関心を高めていった。しかし、当時佐詰業者の多くは、製造技術が未熟であったり、企業的基础が薄弱であったりしたため、粗製乱造という結果を招き、軍用佐詰に関して品質劣悪、腐敗、量目不正確などいろいろな問題を起こした。「石ころ佐詰事件」などの事件のため、陸軍が佐詰自営のために動き出した。一八九五年六月二〇日の『時事新報』に「軍用佐詰は陸軍省で直接製造」という記事が出ている。

陸軍省にて、牛肉その他の佐詰買い上げに就いては、先に種々の風説あり、当局者もこの辺に苦慮する所あ

りしが、一兩日前、その筋の評議により今度、陸軍省にて製造所を建設し、直接に製造すること内決したる由
また陸軍省は一八九六年二月十四日に次のような広告を掲載している。

今般陸軍省に於いて携帯糧食の改良審査に着手するに付之に適する品類を提出せんと欲するもの左の条項に準ずべし。

- 一、食品の備うべき性質は左の如し。
 - 成る可く單純なること／容積小なること／重量輕きこと／形状の背囊中に収むるに適すること／保存に勤ゆること／調理し易きこと／味宜しきこと／原料の夥多なること
 - 二、出品は目方三百目以上五百目迄を納むるを要す。但し、製造方法及び価格書を添付すべし。
 - 三、出品は二月廿九日限り陸軍省内委員会へ送付すべし。
 - 四、出品の代価及び出品に要する運送費其他一切の費用は出品人の自弁とす。
 - 五、審査上の結果に關し委員は提出者に対する弁明の責に任ぜず。
- 廿九年二月十四日

陸軍省内被服裝具陣具
携帯糧食改良審査委員

このような時代背景において、田宮が持ってきたこの「御土産」には單なる友人へのお土産だけでなく、陸軍軍人と御用商人の間における利益關係が含まれていると考えられる。缶詰の商人にとつて、陸軍主計の牧野との關係は陸軍に缶詰を売れるかどうかは重要な意味を持っている。とすれば、お蓮に「これはあなたへお土産です」と言うより、むしろ御用商人から陸軍主計への賄賂であると言つて良からう。

では、なぜ「臘臍獸の缶詰」になっているのか。中村浩の『動物名の由来』¹⁾によると、雄のオットセイは絶倫

な性交精力を持つていると思われており、その臘腦臍の陰茎や睾丸に催淫作用があるとされ、催淫薬や精力増強剤として塩漬けに用いられていた。古く一六一〇年、徳川家康が「陰茎を臘腦臍という、薬にすれば腎氣を増し陽氣を助るとて貴重され」献上を命じてから急に需要が多くなり、一七一八年からは毎年將軍家に献上するため、奥尻島に臘腦臍奉行が置かれるようになった。

一八九五年からこの小説が發表された一九二二年にかけて臘腦獸の缶詰があつたかどうか、いまだ証明資料はないが、一八九五年二月一四日の『東京朝日新聞』には、山崎帝國堂の「オットセイ益壽飴」の広告があり、オットセイエキスを水飴に配合し、肺病、胃弱、婦人病に効有りと宣伝された。また、一九〇〇年五月一七日の『読売新聞』では、東京の青木漁胤組が臘腦臍の肉を佃煮にして販売したという記事が載せられている。注意しなければならぬのは、日清戦争で缶詰の姉妹食品として佃煮が重用され、戦地に大量に送られ、日露戦争で佃煮の軍需用品としての適性が高く評価され、佃煮製造業は大きな発展を遂げたことである。したがって、芥川が臘腦獸の習性と薬用効能及び明治年代の臘腦臍の肉佃煮を知り、これらの要素を工夫して陸軍と深い関連のあつた缶詰に変わって、「臘腦獸の缶詰」という小説の小道具を作り上げたという可能性が高い。

「臘腦獸」は男性の性欲を強める精力剤と見なされている。芥川はここでわざと御用商人田宮の登場によって「臘腦獸缶詰」の話を引き出したのはなぜか。一般的な解釈として、この「臘腦獸」をめぐる雑談によつて、お蓮の昔の恋人「金さん」が牧野に殺害された話題を引き出し、お蓮の狂気を促進させたと見られている。ここの引用では、お蓮の精神不安定の原因が彼女の婦人病にあると考えた田宮は、知らず外国で妾としての生活に苦しんでいるお蓮に対して同情もせずに、逆に彼女をからかっている。「オットセイ益壽飴」にしろ、「臘腦獸缶詰」にしろ、主な効き目としては、女性を「懐妊」させる精力剤であることに注目しておきたい。「臘腦獸」をめぐる雑談において、お蓮に欲望としての性と生殖としての性を結合させようとした帝国男性の支配的な意図を読み取れよう。

「—そうそう臘腦獸の話よりや、今夜は一つお蓮さんに、昔のなりを見せて貰うんだった。どうです？ お蓮さん。今こそお蓮さんなんぞと云っているが、お蓮さんとは世を忍ぶ仮の名さ。ここは一番音羽屋で行きたい

ね。お蓮さんとは――

(二三三頁)

この引用文と対照になるのは、「臙舘獣の缶詰」を持って妾宅に入った場面の冒頭で、そこでは田宮がお蓮のことを「お蓮夫人」と呼んだが、ここの引用で彼はまた昔と同じように「お蓮さん」という呼び方に戻ってきたということである。田宮にとつて、「お蓮さん」という名が「世を忍ぶ仮の名」であり、さらに「妓館」といった風俗場所で客に性を売る「蓮つ葉の女」のイメージと深く繋がっているだろう。従来、娼妓の身体は性的商品として、原則にあらゆる買春に來た男性に開かれるが、妾は妻でなくとも、特定の男性の所有物であるとされている。従つて、お蓮が牧野の大切な「妾」であることに気が付いた田宮は「お蓮夫人」という呼び方によつて、お蓮を独占した牧野の機嫌をとり、「臙舘獣の缶詰」を持ち出すことで陸軍主計の牧野との関係を良くしようとした。その一方で、酔つ払った勢いで、臙舘獣の話からお蓮の娼妓だった過去を引き出したのは、田宮の従来通りにお蓮を低く見て、むしろ彼女の人間性を無視している態度が伺われる。このように、女をモノ化する視線の交錯の中で、お蓮は自己自身であることを見失い帝国男性によつて「商品の性」としてステイグマ化された女性として描かれている。

第四節 狂人としての女

「奇怪な再会」は入れ子型の三重構造になり、婆さんの語り―Kの語り―「私」という経路の背後において、証言者たちはお蓮に対して、好奇心と偏見から誇張して狂気を結びつけている。

Kは「臙舘院」の医師である。これについて、時代背景として明治時代の精神医学及び精神病院の発展を簡単に遡つてみたい。一八七六年に神戸文哉の訳したH・モーズリー著の『精神病約説』が刊行されて以降、日本では精神医学や精神病理学の翻訳書が出版され、一八九四年に呉秀三が『精神病学集要』を著わし、日本の精神医学の基礎が形成された。日本近代精神病院の歴史を探索すると、一八七五年に京都で設けられた京都癲狂院に遡ることができる。それは、当時廃仏棄釈政策によつて空になった南禅寺の一角を病棟に転用して設置された日本最初の公立精神病院であつた。一八七九年に東京上野に設置された東京府癲狂院は第二次大戦に至るまで、一貫して公立の施

設であり、事実上日本で唯一の公立精神病院となった。この二か所の精神病院のほか、日本近代における精神病院はほとんど私的に行われたものであった。一八九二年設立した私立大阪癲狂院は日本で「癲狂院」という院名を標榜した最後の精神病院である。一九〇〇年の精神病患者監護法の制定した前年、一八九九年に東京の田端に開設された東京脳病院は、もはや「癲狂院」という名称を使わずに、日本で最初に「脳病院」という名称を用いた精神病院である。東京脳病院に続いて現われる新設の精神病院の多くが「脳病院」の名称をもって登場し、日本全国に広く使われるようになった。

このように、日本の精神病院の歴史発展を辿ってみると、「奇怪な再会」で描かれた「明治二十八年」の日本社会には、「脳病」といった名称があつたにも関わらず、「脳病院」と名をつけた精神病院がなかったことがわかる。一方、大正期に新しく開院した精神病院には、「〇〇神経科」、「〇〇精神病院」のような名称より、「〇〇脳病院」といったものが割りと多かった。なぜ芥川は一八九九年はじめて出た「脳病院」という名称を小説舞台としての「明治二十八年」と「彼是一年の後」に書き込んだか。単に書き間違いというだけでは説明できない事情があると考えられる。

周知の通り、芥川の知人である斎藤茂吉は歌人であり、精神科医者でもあった。茂吉は東京帝国大学医科大学で学び、一九〇五年に斎藤紀一の婿養子になった。茂吉の義父である斎藤紀一は一九〇三年に青山脳病院を開設した院長である。この青山脳病院は後の一九二六年一日三日に芥川が神経衰弱と胃病のために診察をうけた病院でもある。茂吉は一九二七年に院長としてあとを継いだ。芥川は一九一九年長崎に旅行した時、茂吉の勤務している県立長崎病院を訪ね、茂吉と初めて顔を合わせた。実は、この初対面の前、芥川は既に茂吉の歌に関心をもち、茂吉に推服したという。その後、芥川と茂吉との間に頻繁に書簡を送り合っていた。この小説を連載し始めた一月六日の日付で「大阪毎日へ怪しげな小説を書き出した」という芥川の小沢碧重宛の書簡について、既に第一節で触れたが、さらに注目に値するのは、この書簡においては、「それから斎藤茂吉氏の『あらたま』一部差上げるつもりがあり、ます故御買ひ求めにならずに下さい可成好い歌があるやうです」とも書いているという点である。このように見ると、小説舞台としての明治時代に「脳病院」の名称をつけた病院がなかったにも拘らず、「奇怪な再会」を書い

た際に、知人の斎藤茂吉と青山脳病院が芥川の頭に影を落としていたことは容易に想起できよう。

小説の最後の部分において、Kの語りによってお蓮の狂人としての姿が析出されてくる。

「それから一日か二日すると、お蓮——本名は孟憲蓮は、もうこのK脳病院の患者の一人になっていったんだ。何でも日清戦争中は、威海衛のある妓館とかに、客を取っていた女だそうだが、——何、どんな女だった？ 待ち給え。ここに写真があるから。」

Kが見せた古写真には、寂しい支那服の女が一人、白犬と一しよに映っていた。

「この病院へ来た当座は、誰が何と云った所が、決して支那服を脱がなかったもんだ。おまけにその犬が側にいないと、金さん金さんと喚き立てるじゃないか？ 考えれば牧野も可哀そうな男さ。憲蓮を妾にしたと云つても、帝国軍人の片破れたるものが、戦争後すぐに敵国人を内地へつれこもうと云うんだから、人知れない苦労が多かつたろう。——え、金はどうした？ そんな事は尋くだけ野暮だよ。僕は犬が死んだのさえ、病気がどうかと疑っているんだ。」

(二四二頁)

脳病院医師のKと語り手の「私」の眼に映った「寂しい支那服の女」の姿は哀切であると同時に、(十七)でKが縁日で発狂したお蓮の姿を語った時、「別嬪の氣違い」という言葉の示しているように、お蓮は極めてエロティックであり、男性の視線によって形成された異常な狂女という類型を超える存在とも見られている。しかし、注意しなければならぬのは、この写真を見る主体は正気を表すのは全て日本帝国の男性であり、見られるのは狂気に陥った帝国主義に支配された半植民地中国の女性であるということなのである。繰り返しになるが、ここでは見る日本(男性)の男・權威・主体／見られる支那服の女・支配・客体というまなざしのなかで、さらに日本(男性)の欲望(まなざし)／中国(女性)化された表象」という帝国主義支配の理念を表象していることを指摘しておきたい。Kにとつて、着物を着替えて「支那服」を纏ったお蓮が全く「他者」であり、またこの「他者」が帝国の人間としての自分と違つて、日清戦争に敗れた「中国」の女であり、さらに昔中国の妓館から帝国軍人の妾になった女である。

このように、お蓮は他者化されていると同時に、「寂しい支那服の女」という写真が見る主体と見られる客体との間に残酷な差異を刻み込む明確な印なのであると言えよう。

さらに、見逃してはいけないのは、お蓮と金の悲惨な遭遇に対して度外視しながら、牧野の「人知れない苦勞」に対して同情したというKの態度である。お蓮が日本本所の妾宅に囲われたのは「明治二十八年」であつた。小説(五)で書かれた婆さんの証言によると、彼女が「K脳病院の患者の一人になつてゐた」のは「彼是一年の後」一八九六年であると推定される。ここでは、明治年代における陸軍と精神病学發展の関連を注意しておきたい。一八七四年東京衛戍病院に精神病室が創設され、一九一三年まで日本全国二四か所の衛戍病院に設けられた。一八八七年陸軍一等軍医江口襄はドイツ留学を命ぜられ、一八八九年帰国し、一八九一年陸軍軍医学校で精神病学の講義を担当した。近代日本精神病学の基礎を築いた呉秀三は明治一八九五年陸軍衛生幫助医員となり、一九〇四年にも同職を命ぜられた。この小説でお蓮が脳病院に運ばれたと推定された一八九六年になると、帝国陸軍において精神病は一等症に編入した。一九〇六年陸軍軍医学校はその学生を東大精神病学教室に送り、精神病学を修めしむることとし、一九〇九年陸軍省医務局は精神病学専攻生を東大の精神病学教室に留学せしめることとした。一九一一年陸軍二等軍医正川島慶治はドイツより帰国し、陸軍軍医学校で精神病学講義を担当した¹⁾。以上のことから、陸軍は明治年代から精神病学に強い関心を示していたことが伺わせる。このようなコンテキストと合わせて考察してみると、Kの牧野に対する同情は、単なる帝国男性の共同意識から生じたものだけではなく、明治時代精神医学と陸軍との深い関連の延長線に位置付けられているとも言えよう。

Kのやや事務報告のような冷たい口調と異なつて、狂的な振舞いとらざるをえない背景が娼婦という特殊な過去と、妾という境遇にあつたことを語り手の「私」は見抜いており、そこに女の不幸な歴史の一端を見て取っているのである。つまり、語り手の「私」は常軌に逸脱したと周囲から見なされる狂気によって、理性のディスコースによって排除されて言葉を奪われた沈黙を余儀なくされた彼女自身を表象させる。

第五節 テクストを読み返す

お蓮という中国人女性とは、まず日本男性によって所有され、「妾宅」に囲い込まれた男性の性的対象として他者化、さらに男性の欲望的な視線によって客体化されて見られたり、語られたりして位置づけられることになる。帝国男性を眼差しの主体、半植民地の中国女性を表象されるだけの受動的な対象物とするこの作品においては、中国女性の悲劇が帝国男性の視覚的快楽と欲望的快楽と成り得ている。

この作品では、証言者たちがお蓮に対して、好奇心と偏見から誇張して狂気を結びつけている一方、お蓮の狂気は帝国男性権力側による強制の結果であると思われる。男性権力者は自分の価値観から逸脱するものを狂気と見なし、それを自分が理解できないという異常、劣等性を狂気という形で相手に投影する。お蓮の狂気に女性性と中国人が結びつけられた時、男性性と日本人の項目が理性のカテゴリーに一括される。それ故に、この小説においては、理性／狂気の二項対立の中に、また男性性／女性性、自我／他者、先進／後進、抑圧／非抑圧、帝国／植民地といった様々な二項対立も存在している。

通常の読みでは、「奇怪な再会」において芥川は、中国女性のお蓮を結局は狂気の中へ突き放した描き方で終わっているとして、そこに時代と個人の限界を見るか、あるいはそうした非情な描き方を高く評価することになるだろう。しかし、お蓮の狂気には帝国植民地に生きる女性の受けた抑圧が影を落としてはいても、それは決して女性の自滅の表象ではないと考えられる。今後の課題としては、お蓮自身にとつての「狂気」の意義を考察していきたい。彼女の「狂気」は、牧野の支配と束縛に抵抗し、幻想の異空間において昔の恋人に再会する手段であったと考えられる。彼女の「狂気」は日本帝国の植民地主義からの脱出であるとともに、また父権社会の抑圧から自我意識を回復し、自己主張、解放を獲得して、人間としての再生を表象するものだと言えるのではないか。このような読みの戦略により、芥川 작품을新たな空間に解き放つてみたい。

- 注 (1) 本文のテキスト引用は、『芥川龍之介全集』第七巻による。岩波書店、一九九六年
- (2) 南部修太郎「現代作家に対する批判と要求——全人間的な体现（その一、芥川龍之介氏）」『新潮』、一九二二年六月
- (3) 吉田精一『芥川龍之介』三省堂、一九四二年十二月
- (4) 菊地弘『芥川龍之介事典』明治書院、一九八五年十二月
- (5) 井上論一『奇怪な再会』論——怪奇の行方』『弘学大語文』、一九九四年十二月
- (6) 一柳廣孝「芥川龍之介における〈夢〉・覚書」『名古屋経済大学開学十周年記念論集』名古屋経済大学、一九九〇年
- (7) 岡田豊「芥川龍之介『奇怪な再会』への視点——〈物語〉を物語る「私」の物語として」『駒沢国文』、二〇〇二年二月
- (8) 孔月「芥川龍之介中国題材小説研究」筑波大学博士学位請求論文、二〇〇六年
- (9) 『明治廿七八年日清戦史』第七・八巻附録第百十九「陸軍戦利品整理員数表」参謀本部編纂、一九〇七年
- (10) G・L・モッセ『ナショナリズムとセクシュアリティ』佐藤卓己訳、柏書房、一九九六年、二七—二九頁
- (11) 小山騰『国際結婚第一号——明治人たちの離婚事始』講談社、一九九五年、一一〇頁
- (12) 竹下修子『国際結婚の社会学』学文社二〇〇〇年、三六頁
- (13) 中村浩『動物名の由来』東京書籍、一九九八年
- (14) 『現代精神医学大系 1 A 精神医学総論 I』中山書房、一九七九年